

筑波大学に思う — 一定年退職を控えて —

白木 仁¹⁾

昭和50年筑波大学体育専門学群に入学し、御縁があり、振り返ると今までの人生の大半を筑波の地で過ごすことになっていました。約40年前に、土浦駅に降り、多分バスで40、50分ほどかかり大学に到着したこと、学生宿舎に入居し、個室であることが嬉しかったこと、凄いい田舎であったこと、方言が全くわからなかったことなど色々なことが大変懐かしく頭に浮かんできます。大学に入学し、授業を受け、友達ができ、部活動を行い、とっても楽しい学生生活だったとつくづく思います。陸上競技部の練習は、個人の考えに任せられていましたので、練習についていけないという事は有りませんでした。競技レベルの高さに翻弄され、オーバートレーニングとなって膝にケガを負ったことが私の人生に大きな影響を与えたことであり、人生を決めた出来事でもありました。このケガがきっかけとなり、大学病院の整形外科医の田淵健一先生と運命的な出会いをします。ここで、初めてスポーツのケガのことを知ることで、スポーツ医学の分野の研究・実践に進むこととなります。さらに、時期を同じく、アスレティックトレーナー（以下、トレーナー）というスポーツ現場でのケガの管理をする役割を知り、テーピング・マッサージを実践し、その後大学院へ進学してトレーナーとして選手に接していきます。陸上競技部の中でトレーナーの組織を立ち上げられたことが発端となり、学内の様々な運動部のトレーナーに興味のある学生

が集まり、皆でトレーナー勉強会が始まります。この勉強会は、現在は、水曜勉強会（アスレティックリハビリテーション論演習・実習、スポーツ医学演習などの大学院の科目）となり、大学院で単位化されました。私自身は、大学院修了後に企業のトレーナーとして3年間ほど勤務し、その後、体育センター文部技官として筑波大学に採用していただきました。この技官時代の仲間が後に、筑波大学で仕事を共にすることとなります。その後、平成3年に筑波大学体育センター講師として筑波大学に奉職します。30年間を筑波大学でお世話になりましたが、自分を育てていただき、かつ、各競技、専門分野でレベルの高い方々と共に仕事をするのができて、本当に楽しい教員生活ができました。特に、トレーナーを実践していくには、体育科学だけでなく、医学的内容のノウハウが必要となってきます。これには、筑波大学は、体育と医学があり、最高の場でした。この恵まれた環境のもと、私自身は、教員とトレーナーをハイブリッドで継続し、トップアスリートのトレーナー活動を行うチャンスに恵まれ、プロスポーツ選手、オリンピック選手に接することができ、オリンピックに4回トレーナーとして参加し、メダル獲得の現場に立ち会うことができました。この経験もトレーナー教育に大変役立ちました。体育専門学群の必修授業として「テーピング・マッサージ」が新設され、継続されていることにはスポーツの専門家に必要

1) 体育センター 教授

な知識・技術であることの証ではないかと思っています。さらに、スポーツクリニックの設立、SPEC内のトレーナークリニックの設置、TSA、ADの活動にトレーナーの業務、人員が組み込まれていることは、感無量です。日本のアスレティックトレーナーの創設者の1人として筑波大学に何かを残せたかと思う次第です。

大学院では、トレーナー養成を中心に授業と研究を行ってきました。特に、修士課程で研鑽を積んだ院生は、トレーナーとして日本全国に限らず、世界で活躍しています。さらに、研究素養のあるトレーナーが、スポーツ現場で活動していることにより、トレーナーの指導的立場となる人材に育ってくれています。そのトレーナーが、筑波大学に学生を送り込んでくれて、より優れたトレーナーを養成していることとなっています。博士課程に進む院生も年に、3、4人おり、この院生たちが、スポーツ医学の研究成果を上げています。

体育センターにおいては、「ゴルフ」の授業を通じた、一般学生との繋がりにより、高等教育における体育をより深く学ぶことができ、学校教育における体育・スポーツ教育の意味、位置づけ、さらには、社会におけるスポーツの役割を考える上で大変重要な実践でした。また、体育センター長としての経験は、大学教育を再考し、これからの大学の在り方をより多角的に考えることとなりました。コロナ禍における体育・スポーツの価値、並びに、体育施設の立ち位置について決断を迫られる体験をしました。未だ、コロナ感染の状況は予断を許しませ

んが、体育教育・スポーツ関係者にとっては、我々の行ってきたことの価値を認識してもらう事に繋がると信じています。これらの経験は、アスリートと接する際に大変参考になりました。さらに、公開講座「ゴルフ」を30年以上、開催させて頂き、受講者も2000人を超えています。リピーターも大変多くおり、社会貢献として、大学の役割の一端を担えたかと実感しています。公開講座の経験は、自身より年齢の上の方に対し、どのような指導方法で進めていけば、失礼なく、効果を上げられるかを常に念頭に置き、実施してきました。おかげさまで、私自身のゴルフ技術も向上しましたが、ゴルフ指導方法について、共通体育の経験を活かしながら、独自の方法を確立しつつあります。これからも、ゴルフの指導方法ならびに自身のゴルフ技術を向上していきたいと思っています。

以上のように、筑波大学では、優れた教育・研究仲間に支えられながら私のやりたいことをやらせて頂き、感謝しても仕切れません。

今後の筑波大学に期待することは、我々が受けてきた教育をより進めて、それぞれの時代の学生に適合するように日々、改変して行ってもらいたいと思う反面、人としての基本は、じっくりと教育してほしいものだと思います。

本当に皆様にお世話になりました。私の人生の一区切りとして、筑波大学を去りますが、今後は、微力では有りますが、筑波大学を後押ししたいと思っています。ありがとうございました。最後に、私を身近で支えてくれた、妻と家族に感謝の意を伝えたいと思います。白木 仁